明治新撰

西京繁昌記

上

增山守正編輯

久保田米僊画

明治新撰

西京槃昌記

京都書房　二書堂合梓

西京槃昌記題辭

自北方於人子能於者故。具十二分之筆
去者。亦可以記西京槃昌記也。自北明於
治世。迺於丁情。倩十二分之事業者。不
可以讀西京槃昌記也。甚矣哉。作者者
與讀者之實吟也。丹陵增山
氏。發攻究命辭之淋。又吉記述述戲
文。其丁筆搆思。頃刻子言。馳騁如

西京槃昌記題辭

自昭者於人子。然於書故。具十二分之筆
去者。而以昭西京槃昌也。自昭明於
治道。迺於丁情。備十二分之書學者。不
可以讀西京槃昌也。甚矣哉。作者
與讀。寫者之寓。之筆吟也。丹陵增山
氏。發攻究命題之彬。又喜昭沙汭戲
文。甘丁筆搆思。頃刻子言。馳騁如

嘉。哉。哉。哉。成事。當生而況老於人事。
雖於世務。昊十二分之筆舌老紙形。
抑予亦嘗若西京傳新法。頗有老
可景況。謂之繪名人口。唯筆舌遲鈍。聽
無人情。疎乎世務。今而顧名陸時。未免
嗟嘆。稽之悔也。今者獲增山氏。鈍筆
揮西京槃。因古異景況。且以補予
之沉不及。之之悅可知。況方今開

明。奎運日盛。藩籬皆帝之後。家解
文志。淮左明於治體。通於古情。倣
十二分之古學。以飾陸此書者。
明治九年丙子十一月二十又八日之淺茅
古第。紀撰并書於平安之條磧
御小窩水彩多堂

明治新撰西京繁昌記初編序

王政復古運屬維新自明治之改革以來文明之善開化之美日進月盛煥乎可仰焉置郵亭便電信之捷溯車于陸溯船于海其他百般不可勝枚舉真聚百便於一掌豈非偷快耶然而西京者三府之一而從　桓武定鼎以還數百年來為　皇居止土四神相應山水明媚神社佛閣頗多

勝區舊蹟亦不尠而加之沃野平闊實天府之地也而僕當今寓於此地將有記之間先輩既有此著雖然各心不同各如其面則著眼注意亦隨異也何踏襲之嫌因不顧不文記所目擊之實跡題曰明治新撰西京繁昌記以鳴其盛云爾

明治十年三月　丹波　增山守正撰

苟谷保敏書

西京繁昌記圖

西京繁昌記

明治
新撰　西京繁昌記初編

凡例

一　新京極通繁昌の中觀物技藝時に從ふて去来増減あり故に一定なる能はず唯僕が近頃目擊する所の者を記載するに而已

一　次序錯雜順列を正さず唯僕が意思の浮むに從ふて其事情を書を中に就て菅公の社は我國の神なるを以て佛寺の上に置き加藤氏は治に居て乱を忘るざるの武業を弄するを以て藝林の初頭に掲ぐ聊微意の存る所其他は則錯雜混淆全く新京極通を以て一郭境地と見なさば則可ならん

一僕元来文字ハ暗ー因て看官の快意ニ満つ能ハざるハ則固よりあるを然りといへども徒ニ此盛榮を見て記せざるも亦情あきハ似たり故ニ不文を顧みず西京繁昌の實跡を述て其盛を鳴らさんと欲ス

一實景を記せんと欲せバ其實情を記せざる能ハざる其實情を記せんと欲せバ言猥雑ニ渡らざる能ハず僕豈猥雑を好んや亦止むを得ざるあるを看官乞ふ之を恕せよ

一蛸薬師或ハ安養寺逆蓮華の縁起等の類頗る奇怪ふして虚誕の語無きふ非ず此の文明ハ盛時ニ於て覩ず斯の如き奇怪を掲ぐ大ふ舊習因循の區域を脱せざる者ふ似たり然りといへども共該地の繁昌を述んと欲せバ神祠佛閣の盛を述ざる能ハず神祠佛閣の盛を述んと欲せバ蛸薬師の以て魚名たる所安養寺の以て逆蓮華たる所の縁起を述ざる能ハず其縁起を述んと欲せバ該寺ハ傳記ニ因らざる能ハず是れ自然の勢ひふして止むを得ざれバなり毫も信じて載るふ非ず看官僕の掲載を責る事無んバ幸甚

弓ハ古昔より貴重なる所ふして武門の要器ふ諺ふ所謂弓矢神といへり或ハ弓矢八幡といひ或ハ弓矢の家といふ是ハ恐くハ弓矢を貴び冠なるの證ふり而して近世砲銃の盛ふして弓矢の道遂ふ廢ー商家の手ふ落て翫器ふなる然りといへども共僕此書を編む下

編の第初頭に掲て上巻加藤氏の刀術に對して羽翼兩輪に觀るを是れ亦武を棄てざるに一端にして治に居て亂を忘る可らざるの微意あるを覽者之を省せよ

一　此書新京極通り全地の繁昌を以て初篇とせ而して其他の繁昌は則二編に讓るといふ

明治新撰　西京繁昌記初編凡例終

明治新撰　西京繁昌記初編

目録

發端　菅公社
擔願寺　金蓮寺
蛸藥師　安養寺
居合抜　演史
電機器械　錦魚亭
滑稽　西洋眼鏡
蜑　楊弓
大弓　浮世節
三級酒樓　機關的
繩伎　廢人

竟市
於多福店
道場善哉餅
親玉饅頭
小鳥の藝
名鳥樓
影画
寫眞店
女義太夫
花遊軒
二八力
喉藝
猫鼠同遊
千歳屋緒環蒸
粟餅曲取
演劇

明治新撰　西京繁昌記初編目録終

明治新撰　西京繁昌記初編上

丹波綾部　増山守正著

發端

西京の繁昌新京極通を以て最とす肆店の盛なる爛漫眼を奪ひ觀場の多き珍奇魂を驚し技藝の妙出没神を醉はしむ肆店と觀場と技藝と合せて以て西京の最大繁昌を成す所以なり高貴の者も往き卑賤の者も往き匏蕘の者も往き雄鬼の者も往き伊勢參の者も往き未だ因循脫せざる頭に鬢を頂き行者金昆羅西國の順禮等も往ぬる若し夫れ暮色四山を塡め通店燈火を上る滿街光輝白日の如く諸品一層の美麗を添ふ遊

人雑遝織る如く路を求る所も殊に劇場上の額看客
爭ひ山をなし肩と肩と摩り瘤と瘤と撲つ親ハ子を呼ひ子
を親を尋て叫ぶ混雑の中を無慚やハイゴメンヤスく
と轟々然と無理無体押分け来る人力車何の遠慮も荒
くも男左右へ開く人込ハ殺風景に似たれ共是も繁昌
中の一人波のおつ如くあり実に西京繁昌の眼目盛大
の第一にして凡そ西京の盛榮を知らんと欲せバ先づ
此地より始めむんバあるべからず嗚呼文明の世に逢
ふて此京に寓して此繁昌を觀る記せざ
んバ有るべからざ

菅公祠

菅公の忠誠美徳千歳に近くといへども凛々猶今日の
如く日に新に月に盛ふして其徳毫も地に墜るふ所
謂忠誠金石を貫くの人に非んバ何ぞ能く是の如くな
らんや錦小路通り東の正面に當て菅公の祠あり因て
世に称して錦天神といふ菅公の美徳上錦の字を加ふ
るも偶然暗合して亦妙なりといふべし信者恰も嬰児
の其母を慕ふが如く夜以て日に續き鈴壱心耳を澄し
拍手誠心を表し毎月廿五日殊に子來の例日なり抑此
前の街を寺町通りと唱へ近傍盡く寺院を以て填満し
梵音誦経説法の壱木魚の響き海の如く沸くが如し中

菅公文德
至誠真拜
客連綿日
夜新請看
遺靈永輝
世滿都爭
唱錦天神

よ就て菅公靈祠此間より獨立し一神を以て衆佛より抗し聊か威炎を墜さず高德燦然日より榮へ月より進む所以ハ何ぞや是ぞ忠誠の本文華の源なるよ因ぜバあり今夫ぞ江河滔々と晝夜流ぜて息さるを亦本源の有ぜバなる嗚呼仰ぐべし菅公ハ忠誠至善の無盡藏文華至美の棟梁と僕此書を編するよ於る之を開卷の第一よ掲げ其敬仰の真を表せ〻いふ

誓願寺

僕當寺の緣起書を閲し大略を拔書し〻いふ浄土宗西山派總本山誓願寺ハ天智天皇四年の創立なり〻開山ハ慧隱法師なり本尊

八彌陀如来丈六の座像よ〳〵賢問子效子國父子の作
なるよし然るに人皇五十代
桓武天皇延暦年中山城國へ遷都の時王城の東北より七
堂伽藍を建立なる　今の上京元誓願寺通り方九町　應仁以來度
々の田禄天文五年の秋より又天正元年なり何せゝる兵火
天正元年類焼後　勅命を以て　将軍信長公　羽柴秀吉公
前田德善院等を以て京極三條へ寺地御移り慶長二年
御再建落成のよし惜は哉當寺元治兵火の前猶數度の
兵火類焼より因り諸品類焼其旧より非る者多〳〵ぞ當寺
八弥陀如来四十八靈場の一よりて順礼者信州善光寺
より拜し始めて當寺より終りを結ぶ〳〵こゝや詠歌ハ

連綿香火
夕連晨貪
富不論千
古新利益
恩深誓願
寺頃生菩
提出離人

極樂ハ壽命無量ニ長け給ふ樂しきも又盡る事あり
當寺高名遠近ニ轟き參詣群集雲の如く朝夕絶る期なし中ニ就て十月十四日十夜と唱へ法會修行あり貴賤老若を問ず男女貪富を論ぜず殊ニ嬋集をなすといふ詠歌の声ハ人の心耳を澄して百八煩悩の欲を消し念佛の音ハ八萬四千の村雲を掃ふて真如の月を輝こす平等利益の誓願寺新京極街繁昌の最大基礎と知らるたり

金蓮寺

四條道場金蓮寺ハ人皇九十四代花園天皇の御宇上総國住人牧野太郎源頼氏一子淨阿と申す僧有て洛中念佛を勸進す九十二代後伏見院并ニ御后河端院御歸依ありて應長元年八月此所ニ一宇の伽藍を御建立ありて請ずて開山とす勅願所ニて寺号ハ綿綾山太平興國金蓮寺と花園天皇の勅号ある境内ハ明治五年迄四千坪餘後光嚴天皇より下賜ハ三尊の本尊ハ阿彌陀座像四尺四寸五分行基大師の作ニて元洛東鳥邊野寶福寺の本尊なり嘉慶二年住職現覺上人の寄附なりと聞く宗旨ハ時宗遊行派念佛御符施行の旨趣を歸依し立所ニ一派を開き同宗四條派の本山と相成る　河端院の御願ひニ寄り遊行派二祖より念佛の形木を淨阿へ

讓り洛中化益念仏の大道場となるゞ故今世に至る迄人々只道場といふ但し此化益法式は其後中絶あるといふ

時宗從來念佛堂　衆生化益福無量

世人知否金蓮寺　昔日流行大道場

蛸藥師

藥師如來縁起の拔句といふ二條室町水の上なる藥師如來は傳教大師の真作なり

安德天皇の養和元年に當り洛都室町に林秀長者と云ふ者有り常に藥師を信じ一誓願を發し日々叡山根本堂の如來に詣る凡そ三十餘年に及べり後夢想に因て傳教大師自作の藥師の石像を得たり是を中堂如來

一體分身のよし急き室町に迎へ歸て六間四面の佛殿を營み永福寺と名く其後

後深草天皇の建長の初僧善光なる者有り常に寺傍に住て香花燈燭已ゞ任となして怠らず母重病に臥し蛸を望む善光孟宗ゞ雪中の筍王祥の魚を思ひ孝養の為め蛸を市に求む諸人僧の不行を見將に其器を開こんとせ善光進退窮し一心念願此器を開けば則蛸忽ち八足を變じて八軸の法華經となり瑞光四方を照し諸人驚歎し覺えず合掌同音に南無藥師如來と唱ふ項刻に して經復た蛸に變じて永福寺の池に入り光明を放て老母の頂を照らし病惱忽に愈ゆ是より世人蛸藥師と

いひ爾來此處を御池の町と呼ぶ靈驗普く諸方に傳へ疾を祈せバ則愈へ子を求せハ必生せ福を祈せバ驗あらざるなし中頃に至て圓福寺兼帶の寺となり又後花園院の御祈願所となるとこの參詣更に絶間なく病を祈る為に來る子を求る為に詣る福の為に賽をする蛸の為に來せる人氣に乘て來せる何の氣も無く來せるの附合ひ故に拜せるか往來雜遝沸く如く左右經緯織るに似たり病の為め子の為め福の為め蛸と人氣と附合ひと信と不信と合せて一大繁昌を為せる所以なり

因に云ふ都名所圖會に曰ふ蛸藥師ハ永福寺と号し

て圓福寺の境内に在り

師像ハ石像にして長二尺傳教大師の作なり

本尊藥師ハ三條室町の上水の北地にあり比叡山の東谷より又蛸藥師と号せるハ舊地に澤行基是に藥師堂を建て都下の人澤藥師と称せり

古の風説に侍る云と記せる本文ハ權僧正覺秀著る所の緣起と云ふ

を後世誤て蛸の説を拔摘せ蛸の説ハ三條水の銘を記せる本文ハ大江湖の君子參考あり

未だ何とも是なるやを知らざるの為め此に掲ぐ

名大寺街蛸藥師　藥師魚號又何奇

請看該事因緣記

一目瞭然眸下知

安養寺

姑人徃生餓蓮華　本尊弥陀如來略緣起を拔書して曰當寺本尊ハ春日明神の真作にして女人攝取の如來と号せ昔大

和國當麻の郷より惠心僧都の母公清原氏の信より因て明神老僧より變じ半夜の間より其丈六尺ばかりて相好圓滿なる尊像出現せしと其後臺坐を作り奉るに崩る事三度或夜夢の中に本尊告させ玉ひけるを過し項明神一人の老僧と現ハせ我形像を作せる事是ハ則女人往生の姿なり然せバ八葉の倒蓮華を作り我を安置せ給へ其故ハ大日經の疏の如く男子の心蓮ハ上に向ひ女人の心蓮ハ下に向ひて倒なり悲うに無量生死の中に適々受がたき人身を受るといへども曠劫にも改め難きハ五障三從の形自ら生死に吟行のうもゝむを多の人を惑せし同じく三途の苦を受もむる事其罪幾何ぞや生死是ハ因て改むる事能ハを奈に況や成佛をや我大悲此機を憐んが為に重て三十五の願を誓ふと最懇に示し玉へバ毋公有難く思ひ則佛勅にまうせ倒蓮華を作らせ安置し奉り今立せ玉ふ臺坐是なり誠に此本尊ハ女人往生の悲願を顯し玉ふ故に現世に於ハ女人の諸役安産を守り玉ふ其靈驗數ふるに違ひなしと云云當時本華臺院と號せ閑山ハ惠心院源信僧都第二世ハ妹安養法尼なり道德を慕ふて時の人安養寺と号しける

しかや

女人攝取逆蓮華　夢想從來信佛家

二世法尼安養德　遂成代々寺名花

居合拔

居合拔ハ方今加藤谷五郎なる者を以て最とす大小の刀を拔き人を聚め之を樂まして齒藥を賣り口中を療し齒を拔き齒を入る真に其効を得ざるなし諺に所謂手拍子で齒を拔くの譬喩あり加藤氏其實の実なる者を得るといふべし大太刀ハ柄鞘共に曲尺壱丈貳尺小太刀ハ同じく三尺二寸加藤氏の流義ハ淺山一傳流を學び以て其術を得しる由其術扇を柄頭に立て此扇の地に落る迫に其刀を拔て之を切拂ふ事百一を失せず其他太刀をぬき之を振り之を舞ハを旋轉電光の如く叱々風生ず忽疑ふ刃頭露を飛ばすかと又恐る看客の毀傷

丈二長刀飛舞優神州今日絶同傳無雙妙術淵源在即是淺山一傳流

せん事を拔く手振る手納むる手其迅速流星の如く共に確視をべこらぢ而して加藤氏神手餘閑につて優然たり僕親しく居合場の詞を加藤氏に問ひ武道の一端なるを以て藝林弟初頭に此技を掲ぐ亦治に居て乱を忘るゑつらざるの微意なり以下の詞章は加藤氏嘗て用る所の語を摘し因らに爰に載せて看客の一笑に供を當時日々此語を用ふと云に非ず亦舊を存するの意なる看客夫之を省せよ

居合拔師を親方といひ門弟を奴と唱ふ先生身を繕ひ體を固め場に出て衆に揖して曰僕は加藤谷五郎と申す者斯く繁榮の地に於て人を寄せ居合を拔き候義抑

此義は武藝十八般の中なり偖大太刀の始りといつは其昔勢州度會郡宇治と山田ゞ原に御鎮座まして伊勢神明　天照皇太神宮守護なる女に天津兒屋根の尊と云へるなり上州に亀井山に立せ玉ふ鹿島太神宮是なり時の別當に江笹長兵衛入道長門守なる此家臣に松本豊前守直家と申して脊の高さは六尺八寸計力の強さゞ凡そ八十人力天地覆さん程の勇士たりといへども猶其術を試し見んと有て春四年夏四年秋四年冬四年此四季を象り四々十六ケ年の間居合劔道修行なる其時エイヤハツシと拔たる劔に眼を寫し中段に付ゝ鐵石に坐をしめ八方より劔降り来り火焔を吹き

出さぬ事なれども致さぬ八重垣ふ八重雲アエサ青眼冠り落し天より渦巻く梵字の降り劔磯打つ波の高股返し切かけて御覽に入れまする

抑小太刀の始りといつぬ其昔清和源氏左馬頭源義朝公の九男九郎御曹司牛若丸此人倒るる源氏を起さん と有て鞍馬山へ楯ちこり僧正坊の御弟子となり日々に剱道御修行遊ばされ或時都五條の橋にて武藏坊辯慶夜ふく千人切を致されさうふ其時牛若丸父供養の為と有て鞍馬山より竊に來りて辯慶と打合たる太刀の名ハ龍王鍔攻め鍔碎き無一無量無二無三事も愚や長短の一味の一ハ一と書く味ハ味ふと書た

る文字の理合ひ長ハ長し短ハ短し長き刀を短く拔く利方を御覽に入れまする最前御披露申しく匂ひ入り清正香何も店で商ひなされ百五十文五十文減少致して今日御用とヲツシヤル御方ハ一服百文若し御用とヲツシヤル御方が有らバ重寶の書付を添へて百文御用と仰せバ居合の後ドや アイヤイ親方幸向ふで御用とヲツシヤル御使ひ覽への御方ゞ御待この内ジヤソンナラたんとハいらぬ三服だけアイヤイ親方賣ぜましたマヽ向ふで御用とヲツシヤルコラく今日一番最初に買ふ人ゞ福の神アイヤイ親方買ハぢに立て見て居る奴を見倒し貧乏神でゴザイコラく粗相云ふまんソンナラ

モウ一服加藤谷五郎家傳の齒研き御手よ取て匂ひが無くバ御返しふされアイヤイ親方賣ぢゃ〳〵未ぐ〳〵向ふで御用〳〵ヲッシヤルコラ〳〵余りアッカマシク賣るふ齒研き賣りのアッカマシイのゝハ見て居ても面の悪いアイヤイ親方買ハぢよ立て見て居る奴々猶面が悪いコラ〳〵粗相云ふまいアイヤイ親方うぢゃ〳〵未ぐ〳〵向ふで御用〳〵オッシヤルヤッコアイヤイ能く申してコイ立派な御若い衆や娘さんでも口の臭い人ト嘶をして見よアイヤイ親方肛門ト嘶をするやうでゴザイ

演史

當時西京演史家の高名ある者尾崎といひ南海といひ萬丸といふ其他燕龍東海燕真晴山幸伯圓の輩枚擧よ暇ひまを和漢の治亂古今の得失述ぶる無く說のざる無し一先生高座よ上り威儀を繕ひ容姿を修め故よ眼下の左右を睥睨し恭〳〵衆客を揖し從容として說て曰く僕不肖ふりとは共幸よ貴客の眷顧を蒙り風雨を厭はず時間を違へず速よ駕を枉玉ふ僕の大慶何事ぞうの如んや厚く禮謝し奉る備今日演說よ及びまを讀下ハ昨日の續き豊臣太閤記賤ケ嶽大合戰の掛り口北國の勇將佐久間玄蕃頭盛政中川瀨兵衛尉清秀元來武功名譽の勇士紺糸威の鎧を着し十王作り丸冑猪首

虚談實錄両
相傳演史
胸中淘汰全
和漢盛衰
真似見扇頭
故得古今
權

よ着ち相州貞宗三尺二寸の大業物を帯し馬よ跨り好む處の双廣き大身の鑓を馬の平首よ引添へ柵門を颯と開き真先よ進み動と喚て突て入り大象の波を渡るが如く北越勢を突崩を佐久間盛政大ふ怒り八尺計の鉄棒を軽々提げ中川勢を馬人共よ打倒し互よ入亂きて大よ戰ひ中川清秀ハ鑓を突折り大太刀抜て渡り合真向立割胸板割當るを幸切落し蜘手角縄角十文字馬ハ逸物乗人も達者相州貞宗三尺二寸恰も草を薙ぐ如く餘りよ強く戰ふて冑も着せず髪振こゞし大童とあつて敵を追退るとき九度其勇威天神のおとゝ連島傳藏下田忠次郎佐用田周次兵衛竹島伊平太前後より

四足連とる小熊の如く清秀を中より取籠め打て掛るを清秀即時より四人切伏る玄蕃頭大より怒り鐵棒打振り向ふ清秀太刀を下段より提げ一呼一吸虚々實々玄蕃頭項王の勇を顯ハせど清秀攀喰の威を振ひ更より勝負も付ざりゝゞ佐久間ゞ郎黨近藤無一郎鎗を上げ突掛るを清秀透さず振返り切拂ふんとする所を佐久間玄蕃頭早くも馬を乗りよせ微塵よせんと打込む鐵棒受損じ憐む可ゝ中川清秀左の肩先へ打込む馬より下へ墮と落つ云云と其雄辯ハ風生ゞ賈誼も大息敗北し蘇秦張儀の縱横も合從連衡粉微塵より土崩瓦解の風情あり川柳の句より講釋師見て来たやうより吁詐を付きと恰も疑ふ座上一戰場を現じ出るかと談漸く佳境ふ入り大喝一聲扇子の音ハ霰の板屋を走るゞ如く抑揚頓挫奇々妙々衆客我を忘れて瞳焉たり既より衆客少く倦む俄然音の席上より湧くなり是を睡漢夢中誤て放屁もるふり衆失笑抱腹し演史閑を偷て汗を拭ふ

電機器械

實の實ふる者なり是を電氣器械の裝置ふして方今流行の電信機の景況を知ちむ抑電氣ハ博物新編譯解の電氣論より出る通う大地の體ふ氣なりて電といふ流形の内ふ雜ゝり賦く物として有ちざるふく時として然ゞざるふゝ電氣ハ絶て類を同うせゞ聚り動く時ハ

電とゝ火とゝ雷と静ゝ隠るゝ時ゝ散じて密ゝ藏る其本原の質内ゝ陰陽の二性を具ふ陰陽とハ牡牝雌雄の義ゝ造化中庸の道を得て偏ふゝ倚らゝ過不及ふし器物の中の如き一を孤陰とゝし一を獨陽とゝふゝ則陰ハ必ゝ陽ゝ合ひ陽ハ必ゝ陰ゝ合ふ務めて必ゝ彼此會合し一氣ゝ調和せ天空ふなる二つの雲の如き一を電陰氣とゝし一ハ電陽氣を具ふ二つの雲相近づき勢必ゝ陰陽傳へ引き轟擊て聲を發せ火を見て呼て電とゝし聲を聞て呼て雷とゝ此を乃ち陰陽和せざるの證據ゝ中畧西洋人電氣を作るの法ゝ其理奇ふして用大ゝ藉て以て音信を傳通せる者あり藉て以て瘋癲を醫治せる者あり藉て以て火炮一引燒者あり藉て以て器物を製作せる者あり功盡く述難し其之を製せるの法ハ清水一盃を用て硝強水少許を入れ水ふてもよし強水ハ然して後ゝ一の銅片と一の精錫精錫の外鄙より出づ其中ふ放る時ハ精錫水と同ゝく化し即電氣有て發し出づ若し鐵線と銅片とを以て相連ぬれば電氣自ら鐵線の間ふ傳て鐵を以て鐵を引き傳遞て窮りなし試ゝ物を以て其端ふ觸れハ即光點有て物を射る的然として響きをふし指の甲を彈くが如しと云々右の如き理を以て千萬里の遠きも須臾ふ其信を傳るゝり今此ふ其理を模造し銅と白鉛とを相合して電氣を起し鐵條ふ傳ゝて

太鼓を鳴らし或ハ洋傘の柄より水を放ち電氣の通ぜる景況を知らしめ或ハ曲りたる鐵の両端ふ銕を吸ち人をして之を引去む粘着力甚強し六百目の力有と言ふ或ハ器皿ふ水を入を硫酸と銕を投じて水素を分離し或ハガルハニの裝置を設けて人ふ電氣を送り人々相傳へて凜然毛聳せしむ是を觀場中其實の最なる者なり肆頭の奴誇り呼て曰餘の觀物とハ違ひまして虚假ふらバ價ハ戴ませんと宜ふ哉言や真ふ文明ふ適せし觀物と云ふ可き歟

電氣一條傳鐵端　機關變化具人看

文明開化君知否　即是文明開化觀

錦魚亭

四季共ふ金魚を賣る其實金魚を錦魚ふ誤り記せし者あらん庭ふハ大石を聚む龍蟠の者あり虎蹲の者ハり青松繁茂翠滴らんと欲ふ其他珍草雑へ栽ふ池ふ清水を湛へて金魚を放ち其數億のこなちす其種亦多し朱魚あり銀魚ハり鯛魚あり金鯽あり紅鯉ハり尾長あり鱸臣ハり浮沈游泳爛燦眼を奪ふ瞥疑ふ紅葉池底ふ在るかと又認む水神錦機を織るかと滿庭清觀興云ふ可からず亭善哉餅を賣り又水蛭を賣る其水蛭を蓄ふる猛冬烈寒結氷銅鐵の器を破り巖石を碎くに時といへ共未ず曾て絶る期ふし業亦勤めありと云ふ可し抑金

魚ハ贅魚あり此記も亦贅記なり然りといへ共都會ハ非んゞ此贅魚を賣て活計を營む能ハゞ繁昌地ハ非んゞ此贅記をなして一笑ハ供ふ度ふ贅魚と贅記と合せて一大都會一大繁昌地たる所以なり

奇石怪岩池滿庭　金魚游泳錦魚亭
清涼殊覺風流客　數尾買歸硝子瓶

滑稽

滑稽是れ亦一種の談叢ある者圓轉骨語を以て基礎とし虛實表裏の對語を以て結局とし常ハ愚人を役使するを以て作用とし長吉といひ喜六といひ吉公といひ熊と呼び阿源と呼び阿三と唱ふ是ハ滑稽城中一痴當

千の阿房かり滑稽師辨舌を門帷の内より廻らし大入を千里の外より求る人へ誰か之くぞや則松鶴慶治菊助三木福松の類なり其滑稽圓轉玉の盤を走るが如く活潑潑地天地を以て丸呑とし古今を以て尻より放出し瓢簞を駒を出し打出の小槌より金を飛出し龍宮乙姫の虚誕地獄天狗の妄談阿嬢の遺尿老婆の春情より至る迄舉ざる無く説ひる無し恰も疑ふ滑稽師の口より先へ生ずかと實に滑稽の談叢落語の淵海と謂ふべし一言一語人の頤を解かざる無く人の臍をして西國せしめざる無し坐中甚恐る頤の機關の脱せ雷公の臍を掴み去らん事を既に一人の客あるや滑稽師速に座を上り扇を以て頻に見臺を敲き滑稽を述べて以て絶倒せしむ彼の演史家の威儀を重んじ來客の滿るを待て後呼を開くに似て其言ふいふ是の如く扇を鳴し見臺を敲く者へ客を釣り込む六韜三略の計策かり唯ポンくとアホラシイ獄門臺を見るやうに見臺前に首居へて馬鹿に進入阿房に冠り愚痴に幅輪懸る如く譯も無き事シヤベリマス丸で阿房の狂人の様に見へまして去りあからマンザラ馬鹿や阿房でも出来ません賢い御方へ猶為さるやシマセン到底阿房と賢れの間の子のなる商賣でアリマスに此商賣を聞ふゴザル貴客方も

へイ御隠居さん御免遊ばせや隠居ホヽ誰おやと思へむ備前屋の御内儀さん妙々是ハ久々十年以来能く御登り成されまし〻是ぎ阿里よく備前屋の御内方グワセラレタ是ぎ勘藏よく〻御茶を上ませぬ内儀オホヽヽ是ハ可笑御隠居さんサトのカンザウのと甘い御名むの星でゴザリマス隠居イヤ〻来ざ有マス是ぎ阿蜜く早く出て御眼よ掛リヤ内儀是ハく旨ぬ者揃ひでゴザリマス最早是ぎりでゴザリマスカ隠居イヤ勘藏の姉グ一人有りまし〻グ病身故尼ゞ崎の尼寺へ遣もしまし〻ゞ此頃ハ出世して廣待ちふるりまし〻

西洋眼鏡

サアオハイリヤス〻五十三次名所其外日本アラユル名所唯今丁度ヨイ所サアオハイリヤス〻トシヤベル者ハ西洋裝置の眼鏡肆頭の奴ゞ其状の如く愚れ如く人さへ見れバサアオハイリヤス〻五十三次名所日本アラユル名所唯今丁度ヨイ所と呼ぶ丁度ヨキ筈其裝置二階作りの常仕掛客の多少ゞ抱むらす丁度宜しき所とハ客を鼓舞する名語あり肆頭ハ奇石怪岩を列ね草木を配り植へ鐵道狀を摸造して小蒸氣車の態をかし亦一奇あり行人足を停めて之を觀る彼の奴殊ゞ精神抖擻して例れオハイリヤス云々を頻ゞ述て勞るれバ則黙し休ま生バ又叫ぶ一叫一黙同言同

名區勝地百
觀場裝畫裝
來無盡藏真
形映出疑非
畫人似欲言
花似香

語其一ある鸚鵡の人に話を真似るが如く終日一の變化
かし此奴ふしして鸚鵡を真似るといふ甞く其愚憐れ
むべく其直愛すべし鸚鵡ふしして拙あらば此奴ふしも
如ぜと云いん乎而して此舎の建築能く西洋の風致を
模造し樓上樓下共に眼鏡を配列し能く其圖を寫して
巨大なるむ山川の精彩人物に秀麗歴々として身其
境ふ在る如く覺つぜ奇と呼び快と呼ぶ看客蟻附之を
覗く真ふ夢中の觀とるふ中に就て忽然キヤッと揚聲
する者あり是惡少年あつて、娘の尻を捫するなり其
父激怒方ふ之を撲んとを衆愕然眼鏡一度ふ空し該漢
狡黠道辯して曰く群客雜遝我主を押を覺へば手接を

るれを豈他意のらんや足下止む無んぞ我を押す者を撲て該父止むを得ずして黙そといふ風波頓に定り看客循環回轉遂に出去る又別所に雲僊器械と唱ふる者あり是れ亦眼鏡の裝置異ならずといへ共中に就て機關を設け人物舟船動揺の狀態を觀望せしむる者又一層の妙工美觀といふべし然りといへ共眼鏡の映寫大同小異なり故に此に贅せず嗚呼大都會に非んば是の如き大美觀を樂む能はず抑大裝置と大美觀と合せて一大都會の繁昌の實を呈する所以なり

蜑

桑田變じて海となる古句いかに何日ぞと思ひしに變化の無窮西京の新京極に海の出來龍宮城の形をば模造せし画は虚か実か共數丈四方の池を堀り水を湛へて蜑二人さよと云ひつと呼ぶ水に游泳沈潜し自由自在に水上に波瀾を起し出没し水庭にある鯉魚掬を上りて客の覽觀に供ふ婦女子の水煉れ術に感ぜぬ者はなし是も西京繁昌に一大餘波に湧出し新盛海と知らるる

碧浪新開紫陌頭　青春兩女術尤優
水紋消處沈無跡　忽起波瀾攫鯉浮

揚弓

禮記射義に曰男子生るるに桑の弧蓬の矢六つを以て

天地四方を射る天地四方い男子の事ある所ふりとゝの
き共今の揚弓い事れ有て も間ゝあゝね子供遊びの戯
ふれの玩弄物ゞ何故ゝ減多無性ゝ流行ー踵を接ぎー
遊客冷郎夜を日ゝ續で絶間なー
揚弓店の有名ゝ者都山といひ玉山といふ其他名稱
衆多枚挙ゝ暇なからざるこれを主る者皆婦女子三五
の女二八れ娘紅粉の美を競ひ桃李の艶を爭ふ嬋娟照
手かと疑ひ窈窕小町ゝと認む笑靨愛を盈し明眸秋水
を凝ー媚を衒ひ矢を取て以て獻る此ゝ於て知る揚弓
の武用ゝ益無くして婦人の玩弄物ゝ為る事を
目的有て然ゝ乎心を煉るゞ為ゝして然ゝ乎客ゝ則多

くの山僧書生丁稚の輩中より就て注眼佳人より在て心其正鵠より非る者多き乎體正しからざる弓矢を持つ審固あらざるして此より以て外るを知る

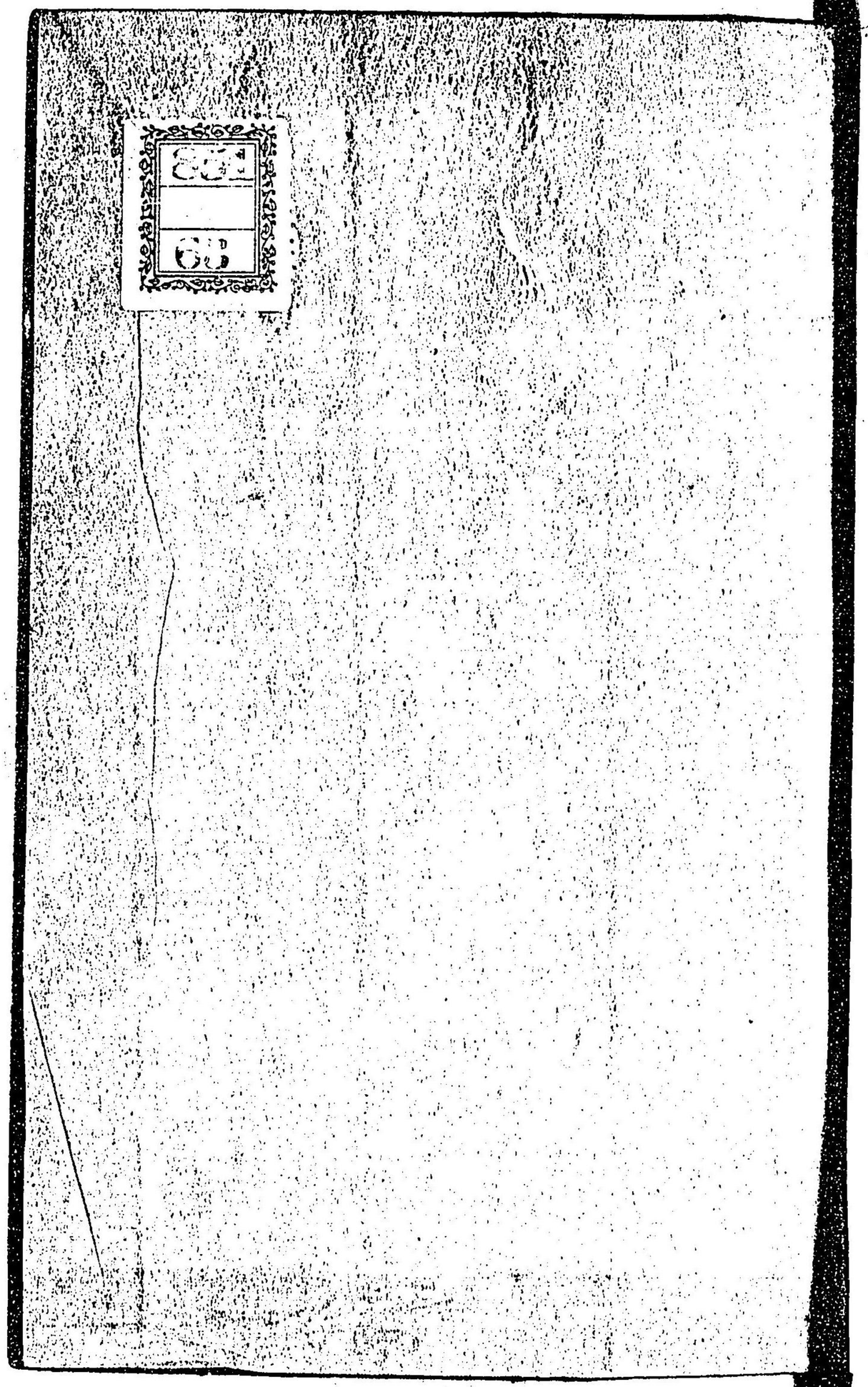
故く此より以て太鼓を鳴らす其音は則鈍々あるを知る

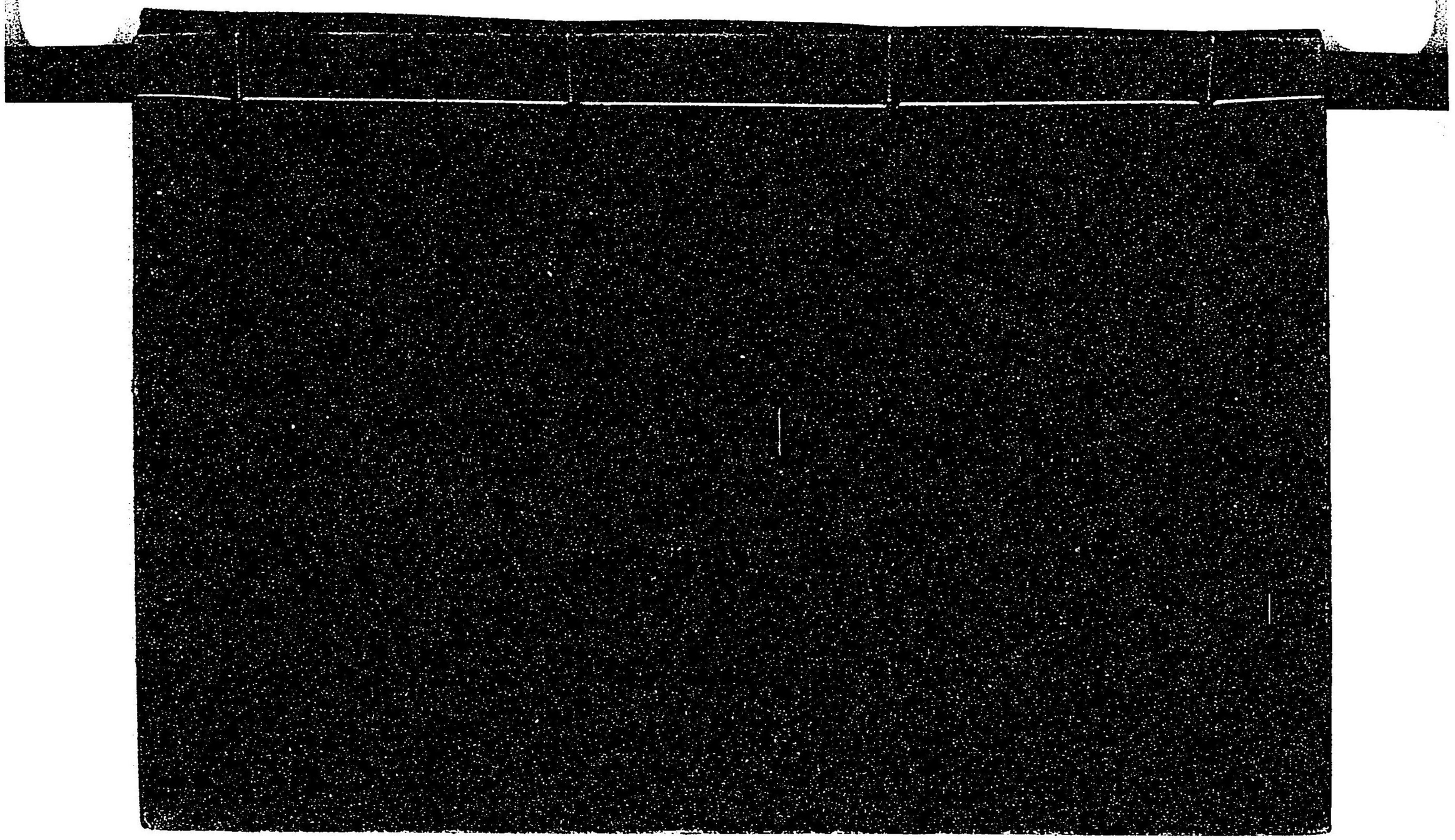
べし此に於て別品より迷ふを知る故く又別品の美矢より我心魂の正鵠を射散さ飛て天外に在るを知る故

恐るべし藝の熟せるを彼の婦ら右に弓を持ち左に矢を挾みて逆に之を射る心より迷ふ所あく弓矢を持つ審固ふして百〻も發て百〻中る其音は賢々たるを知る故

嗚呼是の如き贅具を賣り是の如き贅遊を買ふ是の矢の如き光陰を輕んず益ふき事ふ消光を頻に疑ふ是の人亦贅人多かと然りといへ共古語に曰く張て弛ざるは文武も能はず弛て張らざるは文武も爲ず一たび張り一たび弛ぶるは文武の道なりと是皆大勉強今文武先生の弛休遊ふして果して知る文武と其德を同うせるの人あるを庶幾くは大勉強先生等必ず僕が正鑑を誤る事勿を諒ふ所謂枯木も山の賑ひと贅と不贅と合せて是の都は一大繁昌を為を呼以おり

明治新撰　西京繁昌記初編上　終





025439-001-6

8.51-63

西京繁昌記（明治新撰）

増山　守正／編

和1冊（上23丁）
M10

ADC-2890